

【梅の宿】 うめのやど

『大鏡』第六に「鶯宿梅(あうしゆくばい)」という話があります。

天曆年間(947—956)のこと、清涼殿前の梅の木が枯れたため、新たな梅の木を探していた村上天皇は、ある館にみごとな梅木があることを知り、勅命により移植しようとなりました。

館の主(紀貫之の娘 紀内侍)は

・勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ

〔帝の命であれば従いましょう。しかし鶯が宿は何処と尋ねたら何と答えればよいのでしょうか〕という歌を短冊に記し梅の枝に提げて献上しました。

天皇はこの短冊に目を留め、歌に感じ入って梅の木を返したという故事です。

村上天皇は権力の行使より、鶯や歌心を重んじる方だったようです。いにしえ人が自然との調和を大切にしていたことが窺えますね。自らの失政を省みて修正する勇気のある為政者の行為は権威の失墜を意味せず、むしろ万民の心を捉えます。

「梅の宿」はこの「鶯宿梅」を和語に仕立てた言葉です。

『万葉集』にはすでに梅と鶯を取り合わせて詠んだ歌がありますが、当時は梅に限らず柳・山吹・萩・竹などを背景として詠んだ歌も多くみられます。

平安時代に入ると歌語として梅と鶯との取り合わせが主流となり、『大鏡』の故事はその傾向に副い、梅と鶯を決定的に結びつける結果となりました。現代では日本画によく見かける画題ですね。上村淳之あたりの絵が思い浮かびます。

「ホー ホケキョ」の美声で知られる鶯はヒタキ科ウグイス亜科の鳥。夏は平地から高地までの笹藪に住み「チャッ チャッ」と鳴くそうです。冬には高地の鶯も平地へ下りてきます。その頃、梅の季節と重なるのです。下りてきたばかりの鶯は鳴き方も下手ですが、しだいに上手に鳴くようになります。春の魁として親しまれています。

梅の意匠の茶道具は数え切れないほどありますが、中でも、私は春斎作、了々斎好みの溢梅(こぼれうめ)蒔絵棗が好きです。しかし、写しすら持っていません。残念なことに他流派なのです。20年も前になりますか、道具屋さんで初めて溢梅蒔絵棗(写し)を見たとき、その瀟洒な意匠に魅せられてしまいました。「それ、表さんのですよ」の店員さんの一言に思わず「えーっ」と無念の声を上げてしまったことを覚えています。皆さんはこのような経験なされたことございませんか。

この手の意匠は紹鴎の時代からあったようです(茶道筌蹄)。利休所持の溢梅蒔絵香合を本に藤村庸軒が標有梅香合(ひょうゆうばいこうごう)に写し、さらに了々斎が採り上げたと聞いています。

最近、標有梅香合も溢梅蒔絵棗も本歌を拝見する機会に恵まれ、益々好きになりました。

しかし、私は標有梅香合は梅鉢紋に近く、了々斎好みとは別の想による意匠と拝察しました。

了々斎以降、碌々斎、惺斎がこの意匠を雪吹に仕立てているところを見ると、表千家でもかなり人気のある棗ではないかと想像しています。